

メイ♀ Lv.1

HP

R-18

ADULT
ONLY

メイちゃんと交尾

やせいのメイがあらわれた！



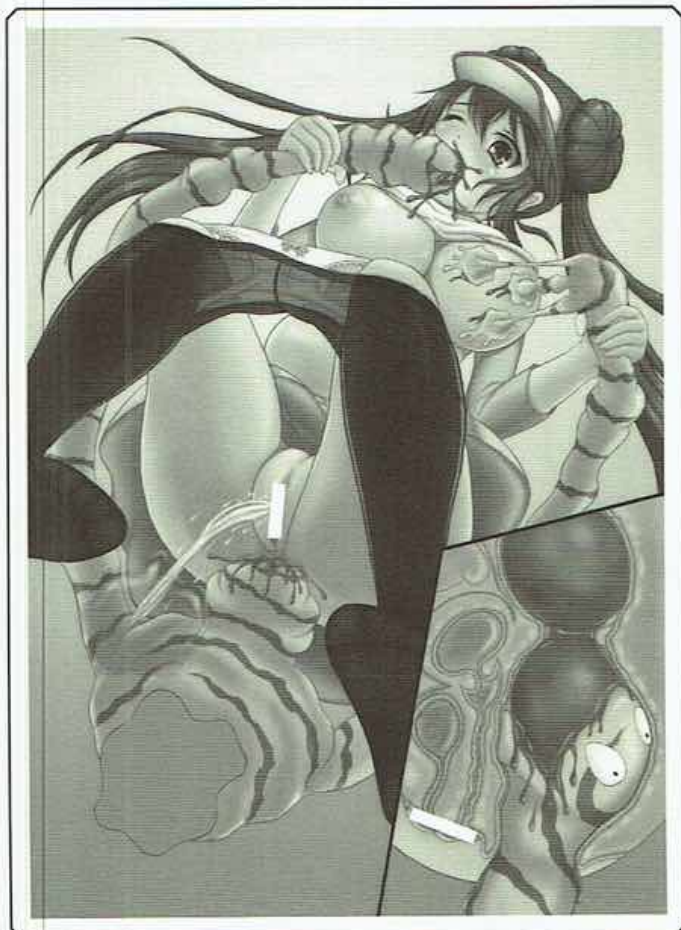
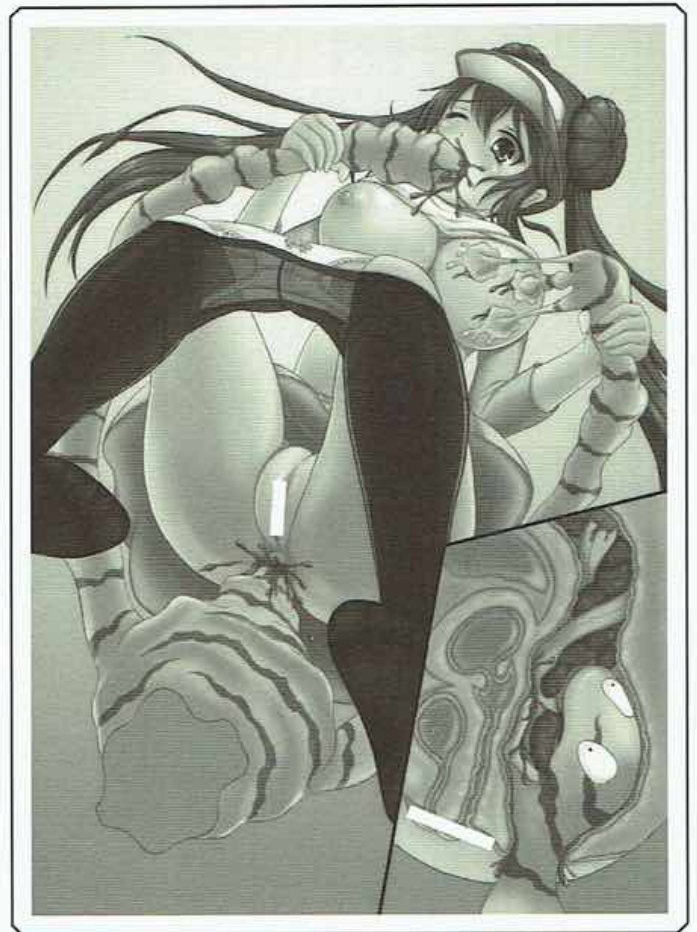


まえがき

はじめまして、こんにちは！きしめんと申します。
 この度は「メイちゃんと交尾」を手にとっていただき
 本当にありがとうございます。
 この本が自分の初同人本です（/ω＼）
 そしてコミケ初当選でした！
 何を描こうか色々迷ったけど、なんとなく色々自由に
 描けるメイちゃんがいいかなと思って漫画を描き描き…
 ダメだ、漫画の才能がねえ～orz

じゃあどうしよう？カラーイラスト集でも作るか？
 売れるかどうかわからないのにカラーイラスト本は
 無謀だよな～
 う～ん、モノクロイラスト+SSでいってみようかな？

そんなこんなで初同人本の制作に取り掛かりました。



まず、本編に入る前に「メイちゃんと交尾」について
 少し説明させてください。

「メイちゃんと交尾」はPixivにて自分が去年の夏に
 投稿していたSS付イラストです。
 メイちゃんが沢山のポケモンと交尾して名トレーナー
 になる話を描く予定でしたが、結局ベトベター1体と
 交尾させただけで挫折しましたwww

まあ、自分に文才がないのもわかってたんだけどねえ。
 それでも描きたいものは描きたいんです！



前回までのシナリオを載せたかったけど意外と長くて
1話ぶんしか入らなかったよ。以下シナリオです。

今日もポケモンを一匹も捕まえられなかった。

「わたしにはトレーナーの才能が全くないのね。」

そんな風に落ち込んでいる私にアララギ博士から荷物が届いた。

「アララギ博士から荷物？なんだろう？」

荷物を開けると何か試験管に入った液体と注射器と手紙が入っていた。

手紙を読んでみると、

「この薬は異なるポケモン同士を交尾させ新種を作る実験で偶然出来たものです。異種ポケモン同士の交尾には失敗しましたが、この薬を人間に使うことでポケモンと交尾・受精が出来るという作用があることがわかったのです。

ただし、ポケモンを受精出来るように子宮と卵巣が変化してしまうため人の子を産めない体になってしまうこともわかりました。」

手紙には薬の説明だけで、なぜアララギ博士がこんな薬をわたしに送ったのかは書いてありませんでした。

「これ本当なのかな？」

ポケモンと交尾できれば、一匹も捕まえられないわたしでもポケモンをゲットできるかも。

そればかりか新種のポケモンを作ることもしられるのかもしれない……

「でも、この薬を使ったら普通の女の子として生きることは出来なくなる……」

ポケモントレーナーとして生きるか、普通の女の子として生きるか？

「わたしはポケモントレーナーになりたいっ！」

「ポケモンしか産めない体、人間じゃなくなっちゃうのよ？それでもいいの？」

「それでも……わたしは……」

わたしは注射器を手に取り薬を吸い上げた。

どこに打てばいいのか書いていなかったけど、どうせ女の子をやめてしまうんだ。

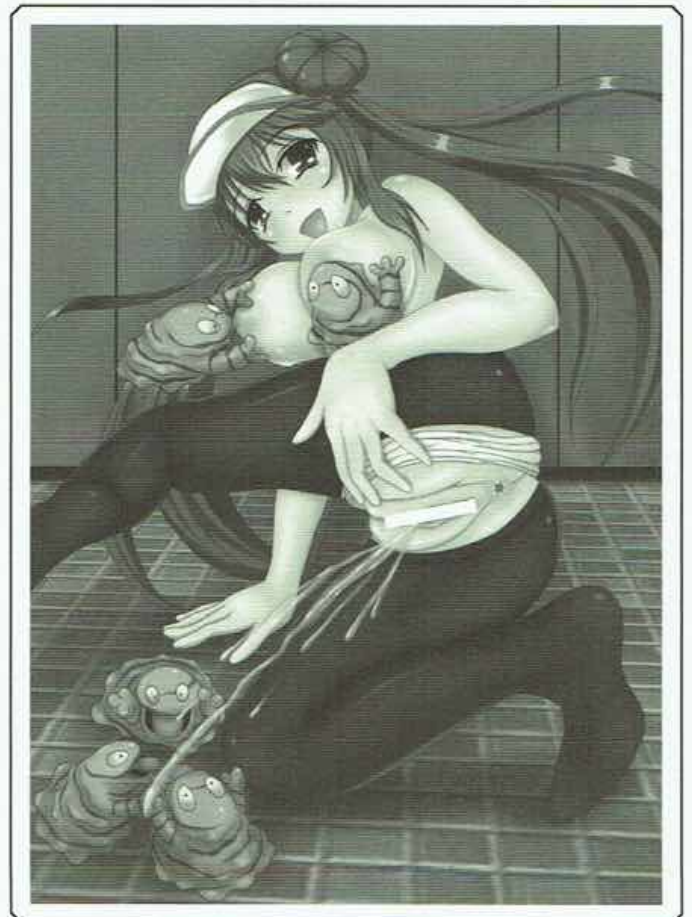
わたしは覚悟を決めて女の子の一番敏感な部分に薬を打つことにした。

「メイは女の子をやめます！ポケモンと交尾して最強のポケモントレーナーを目指します！」

陰核を目指し注射器の針を刺す。プスッ！

続きはWEBで！w

あと、これから始まる本編は前作の続きと言うよりかポケモンとの交尾シーンに特化したものになっております。



「きゃっ！」

突然わたしの右足に何かが絡みつき吊り上げられていく。

あっという間にわたしは近くの木に逆さまに吊るされてしまった。

木に吊るされたわたしにさらに糸のようなものが絡みつく。

わたしは糸の先をたどると、そこには1匹のキヤタピーがいた。

キヤタピーは糸を吐き、わたしの手足を拘束していく。

「うう、きつい……」

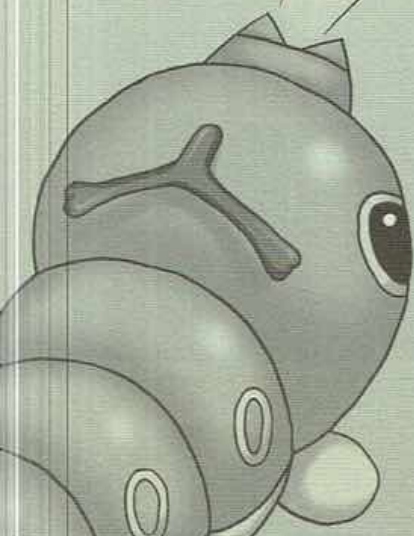
わたしのおっぱいや股間に糸が食い込む。

身動きの取れなくなったわたしの上にキヤタピーが登って来る。

「ああ、そうか。このキヤタピーわたしと交尾しようとしているんだ。」

ポケモンと交尾できる体になったわたしは、野生のオスポケモンを

惹きつけるフェロモンが出ているみたいだ。



キャタピーはわたしを拘束し終えると木から降ろし、口から何か液体を吐いてわたしの服を溶かしていく。体中を這い回るキャタピーにゾワゾワしつつも、オスポケモンが出すフェロモンにわたしの体は興奮していた。服が溶け、あらわになったおっぱいに更に糸が食い込む。

「ああゝん」

食い込む糸が痛いのにわたしの乳首はピンピンに立っていた。

キャタピーの口から触手が伸び、

ピンピンに立ったわたしの乳首を攻め立てる。

「はあはあはあ・・・」

キャタピーの攻めにわたしのおま〇こはじっとり濡れていた。

息を荒立てていたわたしの口に、キャタピーは尻尾の先を突っ込んできた。

「ごんっくっ！」

突然突っ込まれた尻尾の先から、苦い液体が放出される。

苦くて不味い液体なのに、わたしはキャタピーの出す液体をゴクッゴクッと飲み込んでいた。

急激にわたしの体は火照り、あそこがうずうずしてきた。

「ハァ ハァハァ」

キャタピーの出す液体を飲んだわたしはすっかり発情していた。

「きゃたぴい、早く交尾しよう」

わたしはキャタピーに話しかけた。

キャタピーはわたしの言葉を理解したのか、わたしのおま○こに向かって進み始めた。

そのままわたしの中に尻尾を入れてくれるのかと思ったけど、

キャタピーはわたしのおま○この前で止まると糸を吐き、わたしのおま○こを大きく広げだした。

左右に大きく広げられたわたしのおま○こは、

膣口がぱっくりと広がって子宮まで

見えそうなくらい開いていた。

キャタピーは大きく開いたおま○こに満足せず、わたしのクリと乳首目がけ糸を吐いて敏感な部分を糸でつないだ。

呼吸をする度にわたしのクリと乳首が引っ張られる。

痛さと快感で呼吸の度にキャタピーの顔目がけて潮を噴いた。

わたしの愛液でくちよくちよになったキャタピーが準備万端というようにおま○こ目がけて突進してきた。

「くあああ…」

開ききった膣口よりキャタピーの頭は大きく、おま○こが裂けそうな痛みに涙がでた。

キャタピーはわたしの中に入ると、触手を伸ばし子宮口を広げ更に奥を目指した。そして完全にキャタピーがわたしの中に入ると、お腹がぼっこりと膨らみ妊婦のようになってしまった。

しばらくするとわたしを拘束していた糸が溶けて、自由を取り戻した。

わたしはその場で妊婦のように膨らんだお腹を擦って、キャタピーの赤ちゃんの出産に備えることにした。

「あれ？」と、思ったとき急に腹痛が起こった。

今まで柔らかかった子宮の異物感が、ゴツゴツと硬い異物へと変わり子宮のあちこちを刺すような痛みが襲った。

「あのキャタピー、わたしと交尾したんじゃないっ！わたしの子宮入っただけだ！」

じゃ、キャタピーは何をしているの？このゴツゴツと硬い感触……トランセル？

そうだーわたしの中で進化しているんだ。

トランセルのゴツゴツした硬い体に子宮を刺されるような痛みに耐えること数時間。

ようやくトランセルが子宮から出て産道を進んでいくことを感じた。

「早く出てっ、わたしのお腹で進化しないで！」

わたしは両手で自分のおま○こを命一杯広げてトランセルが早く出るように促した。

そして産道押し広げながら出てくるのは更に進化を遂げたバタフリーだった。

おま○こを限界まで広げられ出てくるバタフリーに出産のような快楽をわたしは感じた。

「ばたふりい……うまれりゅうう……！」



突然降り出した雨で、びしょ濡れになったわたしの前に1匹のポケモンが現れた。

「ドククラゲ？」

逃げなきゃ！と思った時にはすでに遅く、ドククラゲの触手から放たれる痺れ液を浴びてしまった。

「ああ、体が痺れて動けないよ……」

ドククラゲの痺れ液には体を動けなくする以外に、もう一つメスを発情させる効果があった。

「ハアハア……体が熱いよ……」

全身ドククラゲの痺れ液でびしょ濡れのわたしに、ドククラゲは追い討ちをかけるように乳首目がけて痺れ液を放出した。

「ああ〜ん、乳首そんな攻めちゃだめえ〜。」

自分で慰めたいと思ってても体は体は動かない。

執拗にかけられる痺れ液に耐えられず、わたしは懇願した。

「ドククラゲさん、その触手でわたしを気持ちよくして〜」

ドククラゲは近づくと触手を器用に動かして、わたしのっぱいを露出させる。

触手でわたしのっぱいを優しく愛撫しはじめた。

痺れ液で発情した体には優しい愛撫は物足りず、

「もっとーもっとと激しく触ってー」とおねだりしてしまった。

その瞬間、左の乳首に焼けるような痛みが走った。ドククラゲの触手から針のような棘が飛び出しわたしの乳首を貫いていた。

「痛いっ！熱いよ！乳首おかしくなっちゃうよ」

棘に刺されて乳首がみるみる大きくなっていく。さらに同じ触手から棘が飛び出しわたしの乳房を刺す。

乳房もみるみる大きくなり、それと同時に痛みが快楽へと変わっていった。

ドククラゲの棘に刺される度に快楽でわたしは失禁していた。

左右のおっぱいは乳首ともども肥大化して元の倍くらいの大きさになっていた。

そしてドククラゲの触手がわたしのおま○こを愛撫しはじめた。

「ああ、わたしのクリトリスもきつとその棘で刺すんだね？」

乳首の何倍も痛いんだろうけど、きつとそれを越えた先には何倍もの快感が待ってるはず。

「いいよ、わたしのクリトリスにもその棘刺して！」

「いやああああああー！」

クリトリスを貫かれる痛みでわたしは大きな悲鳴を上げていた。

そしてトククラゲのクリトリスへの棘刺しは一度で終わらず、何度も何度も続いた。刺されるたびにわたしは悲鳴をあげ、そしてクリトリスが一回りつつ大きくなっていった。痛みが快楽に変わるころには、わたしのクリトリスは男性器並みの大きさになっていた。トククラゲはわたしの肉体改造が終ると、おま○こへと触手を伸ばした。スブスブッとわたしのおま○こ奥深く、子宮目指して触手が突き刺さる。

痺れ液の効果が切れたのか、わたしは体が自由に動くようになっていたので、もっと沢山の触手を入れてもらえるように自らの手でおま○こを広げた。

「もっと沢山触手ちょうだい！わたしの赤ちゃんの部屋もいっぱい棘で刺して〜」トククラゲは触手をおま○こに何本も挿入して、余った触手もお尻の穴やおっぱいに突き刺した。

「ああ、こんないっぱいの触手にいっぺんに刺されたらどうなっちゃうんだろう？」触手はポンプのようにわたしの体に液体を流し込んでいる。

お腹もおっぱいもパンパンにされたわたしは最後のお願いをした。

「わたしの中、いっぱい刺してっ！」

フスッ、フスッスブスブス……

壮絶な快楽で気を失ったようで目を覚ますとトククラゲはいなくなっていた。

お腹は妊娠したように大きくなっていた。

「きつとトククラゲの赤ちゃんかな？」

わたしは大きくなったお腹を見るとその下に肥大化したクリトリスが目に入った。

「コクリッ」

おちんちんのように大きくなったクリトリスを見て生唾を飲み込んでしまった。

恐る恐るクリトリスを触ると痺れるような快楽に思わず少し失禁してしまった。

「キモチイイ……」

もっといっぱい触ったら、もっと気持ちいいはず。

わたしは意を決して肥大化したクリトリスを握って扱きはじめた。

「ハアハアハア……クリチンポ扱くの気持ちいいよ」

そして扱き続けて絶頂を迎えようとしたとき、おま○こが広がってドロドロとした大きなカエルの卵のようなものが出てきた。

「ああ、トククラゲの赤ちゃん……」

クリトリスを扱き絶頂を迎えるたびにトククラゲの卵が出てくる。

わたしはクリトリスの快感と出産の快楽の虜になり次々とトククラゲの卵を産んだ。

「ハアハア、クリチンポ扱きながら出産するの気持ちいいす」

平原を歩いているとポニータと遭遇。

ポニータはあつという間にわたしを押し倒し覆い被さってきた。

ポニータの蹄は焼き鉄のように熱く、わたしのTシャツは一瞬で燃えてなくなっていました。

お腹やおっぱいを踏まれるたびに、焼印を押されたようにジュツジュウと皮膚が焦げていく。けど、ポケモンと交尾できるようになったわたしはそんな火傷もすぐに治るようです。

そうじゃないと炎タイプのポケモンと交尾なんてできないもんね。けど、やっぱり熱いものは熱いんです。

ポニータに踏まれるたびに熱さと痛さで悲鳴を上げていました。

そしてポニータの焼印に慣れたわたしはもっと熱いものが欲しくてポニータと交尾することを決心した。

自ら四つんばいになってお尻を突き上げると、ポニータはわたしのおま○この臭いを嗅いだり舌で舐めて愛撫した。ポニータのヨダレは熱湯のように熱くて、ヨダレが流れ込むたびに熱さで呻き声がでました。

そうやっておま○この中まで熱さに慣らされてから、ポニータのおちんちん挿入です。

ポニータのおちんちんはわたしの腕より太くて、長さも50センチ以上ある大きさです。

膣口におちんちんが触れた瞬間ジュツと焼ける音がした。

「タ、ダメっ！やめて！おま○こ壊れちゃう！」と制止してもポニータはもう止まらない。

スブスブツとわたしのおま○こを焼き溶かしながら奥まで貫いた。

わたしはおま○こを焼かれた痛みで一瞬で気絶した。

しかし、気絶したわたしを起こすように、ポニータはわたしの髪をひっぱり頭を左右に揺さぶった。

目を覚まして、やっぱりおま○こを焼かれる痛みとポニータの激しいピストン運動でまた直ぐに気絶。

気絶しては目を覚まされ、何度も繰り返しついにポニータの射精の時がきた。

すでにポ○ポ○のおま○こ、今更何をされようと変わりはないと諦めたわたしは

「いいよ、出して…わたしの子宮に熱いのちようだい…」

ポニータのおちんちんがさらに膨張した。

瞬間、お腹の中で火山が噴火したような勢いで精液が噴射された！

子宮を突き破るような勢いとマグマのような熱さで声もです、

ただ気を失った。

目が覚めるとわたしのお腹は妊婦のように大きくなっていた。

「そっか、ポニータの赤ちゃん妊娠できたんだ。」

ポニータとの交尾でもうおま○こは壊れて使い物にならなくなるんじゃないかと思ったけど、ちゃんと治ってるみたいだ。改めてポケモンと交尾できる薬の凄さを思い知った。

出産が近づいてきたのか子宮の中が暑くて全身から汗が噴出した。そして暑いから熱いに変わりまた子宮を焼かれる。今度は気を失わずにいられる。

「ちゃんとポニータの赤ちゃん産んであげなきゃ！」

自分に気合を入れて力むと赤ちゃんが産道を通って下りて来る。

同時に産道を焼かれる激痛が走る。

ポニータの赤ちゃんの頭がおま○こ入り口から出てくる。

シューシューと焼ける音がするけど、もうすぐ生まれると思うと力が入った。

体半分出たところでポニータの赤ちゃんが自力で出ようと前足を踏ん張ったのがちょうどお尻の穴だった。ズブツと赤ちゃんポニータの前足がわたしのお尻の穴を焼いた。

ページ計算間違えたよorz

メイちゃんのオナニーでも

お楽しみくださいm(-- --)m



あとがき

こんにちは！きしめんです。

最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。初同人本ということで、色々失敗しましたorz
原稿サイズ間違えたり・・・ページ数勘違いしたり・・・

でも、なんとか完成することができて良かったです。グッズとかも何か作ってみたかったけど、今は発売日に買ったグレンラガンのBD-BOXを見たいです！あとファンタジスタドールも楽しみにしていたので見たいな～。小明ちゃんかわいすぎです。

次回は冬コミの予定です、受かるかな？ダメだったら他のイベントもチャレンジしてみようかと思います。それでは次回みなさまと会えることを祈って、さよならは言わないぜ！



奥付

発効日：2013/08/11

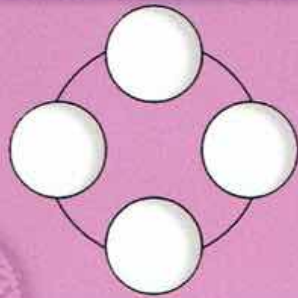
印刷：ねこのしっぽ様

発行者：葉月一日/きしめん

連絡：mizocombi@gmail.com

Pixiv：http://pixiv.me/medossa

無断転載・複製・複写・インターネット上へのアップロードを禁止します。
18歳未満の購入・閲覧・貸出しを禁止します。



2013.8.11 Hazuki Tsuitachi - Kishimen

